完了不定詞について

波多野　満　雄

はじめに

英語には完了不定詞と呼ばれるものがある。動詞の不定形と完了形が合わさったものであり、‘ (to) have pp.’ の形態をとる。この形態は具体的には例 (1a) のように、to 不定詞として使われるか、例 (1b) のように、法助動詞の直後に使われる。機能としては基本的には不定形で表された動詞の時に関する情報を伝える役目を果たしているのであるが、表すことになる時に関する情報は単純明瞭なものではなく様々であり、またそれぞれの英文においてその内のどれを表すことになるかは色々な要素が絡み合って決定される。本稿の目的は完了不定詞の表す時に関する情報はどの様なものであり、またその意味決定はどのような要素と関わっているのかについて考察することである。手順として、まずは to 不定詞として用いられる完了形について考察し、その後、法助動詞と共に用いられる場合について考察する。

(1)a. I seem to have lost my locket.(BNC[1])
（私はどうも自分のロケットを失くしてしまったようだ）
b. I should have done it for myself.(BNC)
（私はそれを自分でやるべきだったのだが）

1．To 不定詞の単純形と完了形

To 不定詞には単純形と完了形が存在する。基本的に単純形は例 (2a)(3a) のように述語動詞の表す時と同じ時を、完了形の場合は例 (2b)(3b) のように述語動詞の表す時よりも前の時を表す。この原則は例文の seem という動詞だけに適応されるわけではなく、例 (4a-d) のように様々な動詞句においても同じことが言える。

(2)a. They all seem to have something on their minds.(BNC)
（彼らは皆何か心配事があるようだ）

(＝ It seems that they all have something on their minds.)

b. I spoke to you yesterday about it, but you don’t seem to have heard me.(BNC)
（私は昨日それについて君に話したけれど、君はどうも聞いていなかったようだね）
(＝ …but it seems that you didn’t hear me.)

(3)a. He seemed to be very happy.(BNC)
（彼はとても幸せそうである）
(＝ It seemed that he was very happy)

b. His anxieties seemed to have been left behind in Cairo .(BNC)
（彼の様々な心配はカイロに置き去りにされたようであった）
(＝ It seemed that his anxieties had been left behind in Cairo.)

(4)a. No one is reported to have been injured.(BNC)
（報道によるとけが人はいないとのことです）

b. I am so glad to have met you again.(BNC)
（またお会いできて大変うれしゅうございます）

c. But Franco was tougher than expected and the interview failed; after it Hitler is supposed to have said he would rather go to the dentist than meet Franco again. (BNC)
（しかしフランコは予想以上にタフで、その会談は失敗に終わった。その後ヒットラーはフランコに再び会う位ならば歯医者に行った方がましだと述べたと思われている）

d. It is very nice to have been allowed into people’s homes and to chat with them. (BNC)
（人の家に入るのを許され、その家の人達とおしゃべりできたことは非常な喜びです）

しかし、完了形が述語動詞の表す時より前の時を示すというのは to 不定詞の完了形のあらゆる場合に当てはまる規則ではなく、しばしば異なった時を表す。例えば例 (5a) では、書き換えで示したように、過去から現在までの継続した時を表していると思われるし、(5b) は述語動詞の表す時より後の時を表していると言える。

(5)a. Time seems to have stood still here for centuries.(BNC)
（＝ It seems that time has stood still here for centuries.）

（時がここでは何世紀もの間止まっていたかのようである）

b. But in August, just before setting off for a month in Switzerland, he still hoped to have finished a draft of the third act by the end of the year.(BNC)
（= …, he still hoped that he would have finished a draft of the third act by the end of the year.）
（しかし８月、スイスでの一カ月の滞在に出発する直前になっても、彼は依然としてその年の年末までに第三幕の原稿を書き終えたいと思っていた）

以上のように､完了形の示す時に関する情報は一つに確定したものではない。また、3 章で考察するが、時とは直接関係しない情報をも表しうるように思われる。次章から完了形が表す意味とはどのようなものなのか、そしてそれはどの様な要素の影響を受け、どの様なプロセスを経て生ずるのかについて考察してゆく。

２．To 不定詞の完了形の表す時

英文の表す意味を正確に捉えるためには、英文の中核と言える動詞が表している時に関する情報を把握する必要がある。動詞が述語動詞の場合、基本的には時制や相を確認することでそれは可能である。しかし、不定形の場合は述語動詞のようにはいかない。まず、不定形には形態として時制を表現する語尾変化が無いので時制が存在しない。よってその代替物が必要になるのだが、進行形を除くと形態が２種類（単純形・完了形）しかないのに、担う機能が①述語動詞が表す時との前後関係（同時・前の時・先の時）②相（完了相のこと。進行相を除く）と多数あるため、時に関するこれらの情報を to 不定詞単独で明瞭に表すことが出来ないのである。従ってこれらの情報を正確に伝えるために、話し手は to 不定詞以外の語句を用いて表す時を確定させている。この章ではどの様な要素の影響を受けて時が決定されるのか、またその仕組みは如何なるもので、英語の文法体系の中での位置づけはどうなのかについて考察してゆく。

2. 1　前の時

まず一章で述べた、述語動詞の表す時より前の時を表す場合について考えてみたい。そこでヒントになるのが大過去と言われる用法である。これは過去のある出来事より前に起きた出来事があり、その両者の時系列を明確にするた

めに使われるものであるが、その際には例 (6a-b) のように過去完了形が用いられる。これは、現在より前に起こったことを表すのには過去時制が用いられるが、過去のある時点より更に前の出来事を表す時制の仕組みがないので、代替として完了形が用いられていると考えられる。このやり方を to 不定詞の完了形にあてはめてみると、to 不定詞にはそもそも時制は存在しないので、述語動詞が表す時より前のことを表すために完了形が用いられていると考えられる。大過去の用法では基準時が過去のある時点なのに対して、to 不定詞の完了形では述語動詞の表す時が基準時になっているのであるが、完了形が前の時を表すという点では同じである。またこの手法は例 (7a-b) のように to 不定詞と同じく準動詞と言われる動名詞や分詞においても用いられており、英語の文法体系の中で様々な文法範疇に適応される用法として確立していると言える。

(6)a. He was using the cordless phone she and David had bought him last Christmas. (BNC)
（彼は彼女とデービットがこの前のクリスマスの時に買い与えていたコードレス電話を使っていた）

b. As the man withdrew a silently as he had arrived, Joan was surprised to find herself alone with the young king.(BNC)
（その男が、やって来た時と同様に物言わず退出した時、ジェーンは自分が若い王と二人きりなのに気付き驚いた）

(7)a. Suddenly she felt angry with herself for having let her emotions get out of control. (BNC)
（突然彼女は、感情を爆発させてしまったことに対して自分自身に腹が立った）

b. The French, having been victims of German occupation, were much less certain about this policy.(BNC)
（フランス国民はドイツの占領による犠牲者だったので、この政策に関しては遙かに自信がなかった）

2. 2　完了相の意味

次に完了相の意味についてはどうであろうか。これは深く考えるまでもなく、完了形を用いているので自然な流れである [(2)]。前節で述べた過去完了形の場合でも、例 (8a-b) のように大過去の用法ではない過去のある時点までの完了相の意味を表すことが出来るのであり、これと同じであると言える。

(8)a. Admission was only granted to those born in Britain or having an ancestral link stretching back two generation, those who had lived in Britain for five years, and spouses of patrials.(BNC)
（入会が認められるのは、英国生まれか二世代前まで遡って先祖が英国籍だった人、それまでに英国に五年間暮らしていた人、そして英国在住権を有するものの配偶者だけです）

b. Still, Vallance said staff cutting had already translated into a 8.1% fall in gross personnel costs during the year.(BNC)
（さらにバランスは、人員の削減によって既にその年の間には総人件費が 8.1％下がったと述べた）

以上のように完了形に対して、述語動詞より前の時を表す機能と、完了相の機能の二つを付与しているわけなので、どちらの意味になるかは文脈で判断することなるわけだが、その際大きな判断材料となるのは時に関する副詞句である。例えば例 (9a-b) にはいずれも過去の時点を指し示す語句、‘yesterday’ や ‘in 1849’ があるので、完了形は述語動詞の示す時より前の時を示していると言える。一方、例 (10)-(12) の場合、いずれも相としての完了形と共起することが多い語句が to 不定詞の中に使われている。(10) は ‘already’ や ‘just’ の語句があることから「完了・結果」の意を、(11) は ‘before’ や ‘once or twice’ そして ‘seventy-two times’ の語句があることから「経験」の意を、(12) は ‘for centuries’ や ‘since Anthony’s death’ の語句があることから「継続」の意をそれぞれ表すと思われる。反対に、これらの指標が存在しない例 (13a-b) のような場合はどちらとも取ることが出来るので、文脈から判断することになるだろう。

(9)a. I spoke to you yesterday about it, but you don’t seem to have heard me.(=2b)

b. She is said to have been ninety years old in 1849.(BNC)
（彼女は 1849 年には九十歳だったと言われている）

(10)a. Much of it now seems to have already been burned.(BNC)
（その多くが今はもうすでに燃やされてしまったようである）

b. Fernando wasn’t the proud man she’d thought he was and Steve was a creep to have just gone off without letting her know why, with whom and for how long. (BNC)
（フェルナンドは彼女が思っていたとおりの立派な男というわけではな

かったし、スティーブは嫌な奴で、何故なのか、誰と一緒なのか、そしてどのくらい長い間なのかも彼女に知らせずに立ち去ったばかりであった）

(11)a. I happened to have met Billy once or twice before.(BNC)
（私はたまたま以前に一度か二度ビリーに会ったことがあった）

b. Indeed, one merchant from Phrygia is known to have visited Rome no fewer than seventy-two times.(BNC)
（実際、フリギア出身のある商人などはローマを 72 回も訪れたということで知られている）

(12)a. Time seems to have stood still here for centuries.（＝ 5a）

b. Her body seemed to have shrunk since Anthony's death, giving her the appearance of an old woman (BNC)
（彼女の体はアンソニーの死後縮んでしまったようで、老女の様相を帯びていた）

(13)a The younger fighter seemed to have recovered from the knockdown.(BNC)
（その若い方のボクサーはノックダウンから回復したようだった）

b. I seem to have lost my locket.(=1a)

完了形が完了相の意味を示す場合、さらに注意すべき点がある。それは完了形はあくまで完了相の意味しか示さないので、述語動詞との相対的時間関係については単純形の場合と同じになってしまうということである。つまり、例 (14a) のように述語動詞が現在形ならば、現在が基準時となり、現在までの完了相的意味、つまり現在完了形と同じ意味を表し、例 (14b) のように述語動詞が過去形の場合は過去が基準時となり、過去までの完了相的意味、つまり、過去完了形と同じ意味を表すのである。また、例文 (15a-b) のように、「希望・意図」を表す動詞の現在形に to 不定詞の完了形が来た場合は未来完了の意味を表すことになる。これは、これらの動詞が目的語に述語動詞が表す時より先の事柄を要求するためであるが、この場合も to 不定詞の完了形は完了相としての意味を表しているのである。

(14)a. Much of it now seems to have already been burned.（＝ 10a）
（＝ It now seems that much of it has already been burned.）

b. I happened to have met Billy once or twice before .（＝ 11a）
（＝ It happened that I had met Billy once or twice before.）

(15)a. There will be some danger, but by the end of tomorrow I hope to have won this battle.(BNC)
（= …, but by the end of tomorrow I hope that I will have won this battle.）
（いくらか危険はあるだろうが、明日が終わる前にこの戦いに勝利したいものだ）

b. This is expected to have doubled by the end of 1990.(BNC)
（= It is expected that this will have doubled by the end of 1990.）
（これは 1990 年の年末までには二倍になる見込みです）

結局、to 不定詞の完了形は、それ自体としては述語動詞の表す時より前の時を表す用法と、完了相としての用法を持っていることになるが、述語動詞の時制も考慮に入れると、述語動詞が現在形の場合、過去、現在完了、または未来完了の意味を表し、述語動詞が過去形の場合は、大過去または過去完了の意味を表すことになる。次章では時には直接は関係しないように見える完了形の用法について考察してみる。

３．非実現を表す場合

To 不定詞の完了形が例 (16a-c) のように、intend, hope, expect, want のような「希望・意図」を表す動詞の過去形に続く場合、通常「非実現」の意を表すと言われている。さらに、このような意を表す場合は実際にはこの形態を取るより、例 (17a-c) のように述語動詞を過去完了にし、to 不定詞は単純形を用いるほうが普通であるとも言われている [(3)]。

(16) a. I originally intended to have figured all the Psittacidae — but I stopped in time; ….(BNC)
（私は本来、あらゆるオウムを描こうと思っていた。しかし、結局止めてしまった）

b. We hoped to have made £250 for the Craig Evans Memorial Fund for the young deaf of Worcester.(BNC)
（我々はウスターの聾の若者のためのクライグ・エヴァンズ記念基金用に 250 ポンド稼ぎたいと思っていたのだが）

c. The group was expected to have completed its recommendations by last spring, but it has been riven by controversy.(BNC)
（そのグループは昨春までに勧告状を完成させると予想されていたが、

論争によりグループは分裂してしまった）

(17)a. He had intended to visit Matthew's bedroom alone but changed his mind and went to the kitchen.(BNC)
（彼は一人でマシューの寝室を訪れるつもりであったが、気が変わり台所に行った）

b. Patricia Martin, 38, had hoped to keep an affair secret from her husband but she fell pregnant despite having been sterilized.(BNC)
（パトリシア・マーティン、38 歳は、情事を夫には秘密にしておきたいと思っていたが、不妊手術を受けていたにもかかわらず、妊娠してしまった）

c. He had expected to sweep Rachel off her feet and carry her off to New Zealand with him on the next sailing, but he had reckoned without her Jewish father and mother, the new Zionism and Rachel herself.(BNC)
（彼はレイチェルを夢中にし、彼女を掻っ攫って次の航海でニュージーランドに連れて行きたいと思っていたのだが、彼は、彼女のユダヤ人の両親のこと、シオニズム運動のこと、そしてライチェル自身の気持ちのことを計算に入れていなかった)

事実関係としては確かにその通りであろうが、何故このような意味が生じ、またそれぞれの形態が生まれているのであろうか。まずは通常使用される述語動詞を過去完了にする場合について考えてみる。「非実現」を意味するこの構文が何故過去完了形になるのか。実際、例 (18a-d) のように完了形を用いずとも、過去形で過去の主語の「希望・意図」を表し、それが実現しなかったことを逆接の意味の接続詞 but などを用いることで表すことは可能である。しかし述語動詞が過去時制で、to 不定詞も単純形を用いているということは、現在とは切り離された過去のある時点での「希望･意図」を述べているということになり、出来事が実現したかどうかについては中立的な表現になると考えられる。

(18)a. Henry VII intended to have the remains reinterred in the new chapel but he himself died the day after its consecration and no one else bothered themselves with Queen Katherine's corpse.(BNC)
（ヘンリー七世はその亡骸を新しい聖堂に改葬するつもりであったが、彼自身が聖堂の献堂式の翌日に死んでしまい、他にキャサリン王妃の亡骸を何とかしようとする者はいなかった）

b. My mother hoped to have a daughter after I was born, but for five years I was the only child.(BNC)
（私の母は私の次は娘を望んでいたが、五年間子供は私一人だった）

c. We expected to have security problems with Mrs Thatcher, but in fact they were nothing compared with those posed by the other guest on that show — Barry Manilow(BNC)
（我々はサッチャー夫人に関して警護上の問題が生じると予想していたが、実際は、そのショーに来ていた他のゲストによって引き起こされたものに比較すれば何でもないものだった — バリー・マニロウ）

d. They wanted to have these factories in other parts of Britain but the Government persuaded them to place their new works in this region to help to reduce unemployment.(BNC)
（彼らはこれらの工場を英国の他の地域に置きたいと思っていたが、政府の説得で、失業率削減の支援策として、この地域に新しい工場を置いた）

それでは述語動詞に過去完了形を用いた場合はどうであろうか。この場合も通常の過去完了の文と同様に過去の基準時があり、それより前の出来事であるいうことを表していると考えられる。この過去の基準時とは実現しなかった時点のことである。そして、ここで言う「非実現」とは、発話の時点で実現していないことを言うのではなく、この基準時の時点で実現しなかったことを述べていると考えられる。例えば、例 (17a) では but 以下の部分で表している時点である。そして実現しなかった時点より前に希望し、意図していたことなので過去完了形を用いるのである。従ってこの用法は「非実現」を表すための特殊な用法というわけではなく、一般的な過去完了使用の延長線上にあるもので、過去の基準時が語句として明示されていないものと言える。その証拠に例 (19a-c) ように同じ構文でも実現しなかったことを表さない場合もある。いずれも通常の過去完了形の用法と考えられるものであり、この構文が特殊な意味を有しているわけでないことが分かる。述語動詞に過去完了を用いた場合、この表現を用いた時点で過去の基準時を聞き手に感じさせ、それまでのことなのだがという保留を付けることになるのである。そして、その保留によって話し手は「非実現」を暗示することになるのである。

(19)a. He had made the woman pregnant, and the woman had intended to have the

baby.(BNC)
（彼はその女性を妊娠させてしまったが、その女性は子供がほしいと思っていたのだ）

b. She had expected to meet him one day, but never like this.(BNC)
（彼女はいつか彼に会えるのではと期待していたが、こんな形で会うことは決して望んでいなかった）

c. Just as Harrowby had hoped to bring politics within the orbit of science, so the lectures at this focal point in the metropolis indicate how science permeated all Victorian culture.(BNC)
（ちょうどハロウビーが政治を科学の範疇に持ってゆきたいと願っていたように、首都で関心の的になっている講義は科学が如何にヴィクトリア朝の文化に浸透していたかを示すものである）

次に to 不定詞の完了形を用いた場合について考察してみる。述語動詞は過去形なので、これは前述のように現在とは切り離された過去のある時点での「希望・意図」を述べているだけである。問題となるのは完了不定詞の部分である。完了不定詞の基本的な用法については既に述べたように、述語動詞の表す時よりも前の時を示すことであったが、「希望・意図」を示す動詞の後に不定詞が来た場合は、例 (20a-b) のように述語動詞より先のことを表し、to 不定詞が完了形なので、最終的には未来完了の意味を表すことになる。これは 2.2 で述べたように、動詞の特性から、および前置詞 to が本来的に持っている方向性の意味からしても自然であり、不定詞が完了形になっても同じである。

(20)a. There will be some danger, but by the end of tomorrow I hope to have won this battle.（＝ 15a）

b This is expected to have doubled by the end of 1990.（＝ 15b）

数は少ないが、例 (21) のように「以前」の意味でもなく、「先のこと」でもなく、「非現実」のことでもない「完了相」の意味のみが出ているものもある。

(21) For each key stage, programmes of study are to be drawn up specifying what pupils of different abilities are to be taught in each subject, and attainment targets set out specifying the knowledge, skills and understanding that they are expected to have acquired by the end of the stage.(BNC)

（それぞれの重要な段階ごとに学習計画が立案されることになっており、それによって様々な能力を持った生徒たちがそれぞれの項目において何が教えられるべきかが特定され、さらに学力達成目標設定により生徒が各段階の終わりまでに修得することが期待される知識、技能、そして理解力が特定される）

最後に「非実現」の場合である。まずは「非実現」はどこから生じているのかを考えてみる。「非実現」と類似の概念に「非現実」や「仮想世界」がある。いずれも「非存在」を表す。通常これらは例 (22a-c)(23a-b) のように仮定法を用いて表現する。現在の事実に反する仮定は例 (22a-c) のように現在形の時制を一つ下げ過去形にし、過去の事実に反する仮定では過去の時制を一段下げることは出来ないので、完了相を用い、例 (23a-b) のように過去完了形とするというのが仮定法の基本である。この時制を一つ下げる代わりに完了相を用いるという操作が過去の「非現実」を表していることになる。「非実現」を表す to 不定詞にもこれと同じ用法が用いられているのではないかと思われる。つまり前述のように、to 不定詞が述語動詞の表す時より「以前」を表すために、大過去を表す時と同じように、完了形を用いたのと同様、to 不定詞が非実現を表すために、仮定法と同じように、完了形を用いているのだと考えられるのである。

(22)a. Well if I were you I'd get in touch with me if anything turned up.(BNC)
（まあ、もし私があなたならば、何か起こったら私に連絡するでしょう）

b. I wish I had a video camera to tape your pretty head.(BNC)
（ビデオカメラがあったら君のかわいい頭をテープに撮れるのに）

c. It's time you settled down and had children.(BNC)
（君もそろそろ身を固めて子供を持っていい頃だ）

(23)a. If I had known how awfully bitter this love would be, I'd have avoided you, and been deaf to you!(BNC)
（この恋がどんなにひどく辛いものになるか、もし私が分かっていたら、私はあなたを避けていたでしょうし、あなたの言うことには耳を傾けなかったでしょう）

b. 'I wish they'd let me have my telephone,' Elinor whispered.(BNC)
（「彼らが私に電話を持たせてくれていたらなあ」とエリナは小声で言った）

４．法助動詞＋完了不定詞

この章では法助動詞に完了形が続く場合について考察を行うが、法助動詞は通常根源的意味と認識的意味に分かれるので、以下それぞれについてその意味と発生プロセスについて見てゆく。

4. 1　根源的用法の場合

根源的用法の could, might, should, needn't 等の後に完了形が用いられると例 (24a-d) のように「過去の非実現」を表すことが多い。この現象は「過去」と「非実現」に分けられる。後者は to 不定詞の完了形において完了形が「非実現」を表すのと類似の現象であると言える。では「過去」はどうであろうか。(24c) の should、(24d) の need は現在のことを述べる場合も (25a-b) のように語形が変わらないので、この法助動詞が「過去」を表しているとは考えにくい。従って完了不定詞がその役割を果たしているということになる。結局、この構文における完了形は「非実現」と「過去」の両方を表す働きをしているということになる。しかし、完了形が過去を表す働きは、to 不定詞や動名詞・分詞など他の文法範疇には見られないものであり、このままでは収まりが悪い。したがって更に考察を押し進めると、類似の現象に「前の時」を表す働きがあることに気づく。ただし、完了形が「前の時」を表す場合、述語動詞が基準となっていたが、「法助動詞＋完了不定詞」においてはそれ自体が述語動詞であり、基準となる時が明示されていないのである。では基準の時は何かというと、それは現在ではないかと思われる。つまり例 (25a-b) のように「法助動詞＋単純形」が表す現在を基準時として、それより前の時、すなわち「過去」を表すのではないかと思われる。

(24)a. 'I could have died,' she whispered .(BNC)
（「私が死ぬこともありえたのよ」と彼女は囁いた）

b. One would think that Sotheby's might have learned from their oversight five months earlier, but they didn't have a clue again.(BNC)
（サザビーズが五カ月前の見逃しから学んでもいいのではなかったかと人は思うでしょうが、再び彼らは手掛かりひとつ掴めなかった）

c. I should have checked her suit again.(BNC)
（私はもう一度彼女のスーツを調べるべきだったのですが）

d. He need not have worried.(BNC)
（彼は心配する必要はなかったんですが）

(25)a. You should think before you say yes.(BNC)
（賛成する前によく考えた方がいいよ）

b. But consumers of seafood need not be alarmed.(BNC)
（しかし、海産食品の消費者達は、驚く必要はない）

しかし、これも to 不定詞の完了形のところで指摘したように、完了形は本来完了相を表す形態なので、完了相の意味を表す場合がある。但し例 (26) ではあくまで「非実現」の枠内での完了の意味が表されている。

(26) Mike, their son-in-law, then suggested that as that was two thousand years ago, 'they could have had another fifteen hundred by now' and, sensing his in-laws' disapproval, continued 'unless they're on the pill'.(BNC)
（マイク、彼らの義理の息子なのだが、それが二千年前のことだったので、「奴らこれまでに、もう千五百人も子供が出来ているんじゃないかな」と言った。そして、義理の両親が同意しないのを感じて、「奴らがピルを飲んでなければね」と続けた）

4. 2　認識的用法の場合

認識的用法の場合、「非実現」の意味はなく、過去の出来事に対する推量を示すと言われている。この「過去」の意味については根源的用法の場合と同じように考えることができる。つまり、例 (27a) のように、「法助動詞＋単純形」は現在または未来の出来事に対する推量を表すが、これは例 (27b) のように法助動詞が過去形でも同じである。よって、例 (28a-d) のように完了形を用いているのは推量対象が過去の出来事であることを表すためであると考えられるのである。

(27)a. Banks may wish to make additional loans, but customers may not want to borrow. (BNC)
（銀行は追加の貸し付けを行いたいかもしれないが、顧客は借りるのを望まないかもしれない）

b. What I have to say might upset you even more than your father's heart attack. (BNC)
（これから私が言わねばならないことはあなたの父親が心臓発作を起こしたと言うよりももっとあなたを驚かせるかもしれません）

(28)a. The lifting of a kettle lid by the steam from boiling water may have led Watt to the discovery of steam power.(BNC)
（やかんの蓋が沸騰するお湯からの蒸気で持ちあげられるのを見て、ワットは蒸気の力に気付いたのかもしれない）

b. Ivor thought she might have gone through his briefcase and found a letter from me.(BNC)
（アイバーは彼女が自分のブリーフケースを調べて私からの手紙を見つけたかもしれないと思った）

c. ‘They should have called you Helen,’ he observed quietly.(BNC)
（「彼らは君をヘレンと呼んだはずだ」と彼は静かに述べた）

d. A similar situation must have existed in Peru at the time of the Spanish Conquest.(BNC)
（同じような状況がスペインによる征服の際にペルーにもあったに違いない）

しかし、この認識的用法の場合も例 (29a-b) のように完了相の意味が生ずる場合がある。

(29)a. But it should have gone by now!(BNC)
（しかし、それは今頃はもう無くなってしまっているはずだ）

b. Then Mendez, who must have just crossed the street, was standing there.(BNC)
（その時、メインデスは、ちょうど通りを渡ったところだったにちがいないのだが、そこに立っていた）

おわりに

以上完了不定詞についての考察の結果をまとめると次のようになると思われる。

- 完了不定詞はその形態に様々な文法的機能を付与されている。
- その第一は述語動詞が表す時より前の時を表す働きのことであり、大過去と用法と類似のものである。従って、述語動詞の表す時により、過去や過去のある基準時よりも前の出来事を表すことになる。同じ準動詞である動名詞や分詞も同じ機能を有している。
- 第二は完了相の意味を表す働きのことであり、これは完了形本来の機能であ

る。従って、述語動詞の表す時により、現在完了や過去完了、そして時には未来完了を表すことになる。やはり動名詞や分詞も同じ機能を有している。

- 第三は非実現を表す働きのことであり、これは仮定法において時制を繰り下げる代わりに完了相を用いることで非現実を表す用法と類似のものである。
- それぞれの英文において、以上の機能のうちのどれが実際に用いられているかは完了形それ自体では確定できないことが多く、述語動詞の意味、時制、完了形として用いられている動詞の意味、そして時の副詞句など他の要素との兼ね合いで決まることになる。

NOTE

(1) British National Corpus より採取した例文。本稿の例文の全てが BNC からのものである。BNC とはオックスフォード大学出版局が中心となって作成した現代イギリス英語（口語、文語の両方を含む）のコーパスである。詳細についてはインターネットの以下のアドレスより入手可能。http//www.natcorp.ox.ac.uk/

(2) 下記の例 a-b のように動名詞や分詞の完了形は to 不定詞と同じく、述語動詞の表す時より前の時だけではなく、完了相の意味でも用いられる。

a. Unfortunately, the reported effect on some of the older generation is to make them regret having lived so long and apologize for their need to call on more services than do younger people.(BNC)
（残念なことに、報告によると、年配の世代の何人かに対する影響は、長生きしたことを後悔させ、若者よりも公共サービスに頼る必要があることを申し訳なくおもわせることだった）

b. Having studied these on and off for some days, what is your opinion?(BNC)
（これらを断続的に何日か研究してきて、現在のあなたの意見は）

(3) 下記の例 a-b のように、述語動詞と to 不定詞の両方を完了形にする場合もある。

a. They had hoped to have had both Matthew Dobson and Richie Hunter on board for last Friday night's game with Ulster.(BNC)
（彼らはアルスターとの先週の金曜夜のゲームにはマシュー・ドブソンとリッチーハンターの両名をチームの一員に加えたいと思っていたのだが）

b. I had hoped to have had the privilege of catching your eye, Mr. Deputy Speaker, on the first day of this debate, when it is acknowledged to be a free-for-all and any subject can follow another.(BNC)

（私はこの討論の初日に、議長代理、あなたの目に留まるという恩恵をこうむることが出来たらなあと思っていたのですよ。その日は飛び入り参加も認められていましたし、どんなテーマも取り上げられました）

REFERENCES

Ando, Sadao.（安藤貞雄）2005.『現代英文法講義』東京：開拓社.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo: Kaitakusha.

Jespersen, O. 1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles.* 7vols. Copenhagen: Munksgaard. Heidelberg: Carl Winter. London: George Allen & Unwin.

Oe, S.（大江三郎）1982.『動詞 (Ⅰ)』講座学校英文法の基礎 4. 東京：研究社 .

Oe, S.（大江三郎）1983.『動詞 (Ⅱ)』講座学校英文法の基礎 5. 東京：研究社 .

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage.* Oxford: Oxford University Press.